

睡眠の演技をめぐって

小田 幸子

能の演技の歴史的变化の傾向として、写実性の変質と、多様性・個別性が整備され類型化したことが挙げられる。江戸初期頃の型付には、今日の目から見ると写実性の強い、あるいは類型化以前の演技が記されていることが少なくない。慶長元年奥書の『童舞抄』に、人物が眠る演技に関して次のような記述があった。

○舞台の中途よりさきへ出て、つくばひておがむ。……「ふた、びなどかあはざらむ」と云返しより、眠る心をして、うたひを微音にし、面をすこしうつぶく様に、心持あしるべし。「あら不思議やすこし睡眠のうち」と謡ひ出さん時、面をあぐる。

（三井寺）

○「邯鄲の枕にふしにけり」と云返しに臥。微音に眠り入たる様にうたふなるべし。

（邯鄲）

面をうつむけ再び上げる、枕をして舞台上に横臥するなどの視覚表現は今と変わらない

が、傍線部の如く（上ゲ哥）の末を「微音」にするという聴覚表現を伴っているのが注意を引く。『童舞抄』の著者下間少進が、師匠の金春炭運から伝授された事柄を記した『炭運江間日記』の（三井寺）に「……ふたたびなどかあはざらん」と（心）時分より、ねむり入るやうに謡。又ハ面ノ心も同前也。此心専用也」とあるのも同様の演技と解されるから、これは少進個人の工夫ではなく、当時の金春流で普通に行われていたと考えてよい。この演技で興味深いのは、台本内容に即した音曲面の工夫がなされていることである。単に（上ゲ哥）の末をやや小声でゆっくり目に謡う（現在（三井寺）では心持ちこのように謡うという）といった程度のことなのか、あるいは「地取」のように音量を極端に下げるとか判然としないものの、音量変化をこのように明示した例は珍しく、謡の音楽的技法と台本内容との結び付きを考察する一つの材料になるう。

それはともかく、型だけでなく音量も変えるのは、「眠り入る」、つまり次第に眠り落ちていく様子を表現するためらしい。日常に近い形の演技を行うことで、眠った状態を明確に示そうとしているのだらう。現在でも睡眠の演技は比較的具象性が強いが、かつてはより写実味の濃い演技が多くの曲で行なわれていたようである。たとえば、現行では面をうつむけるだけの（盛久）では「経ヲカザシテネブル」（妙佐本仕舞付）ことがあったし、江戸初期筆のワキ伝書『謡の秘書』（能楽研究所蔵）の（紅葉狩）の記事「扇をひろげ、左のひざに左のひちをつき、左の手にて扇をひたいにあて、右の手さきにてひざをさへ、ひちをいからせてねむる也」は、ワキの「枕の扇」の型は現在のように扇を閉じるのではなく、開いているのが古形であったことを思わせる。また、今では邯鄲一曲にしかない横臥する型が（一角仙人）でも採られていた。

○「夫人の情に心をうつし」、夫人をみる。

右へまはる。こまはりをして、左のかたへふし、小袖を上にかけておく。……「岩や俄にめいどふするハ、何の故に有哉らん」、われと小袖をとりて、をきて座している。

（大蔵氏紀筆『金春安照仕舞付』）

舞を舞ううちに酔い臥す体で座りこみ、団扇を顔に当てる現行の型に対して、右では横

に臥し、その上に小袖をかけている。また、江戸中期頃の『仕舞付』（喜多流か。能楽研究所蔵）には、「台ノ角ヲ枕ニシテ寝ル也。尤団扇ヲ顔ニアテ、両手組合テネルナリ」と「両手組合、団扇ヲ顔ニアテ、笛座ノ方ヘ足ヲ出し、シテ柱ノ方ヲ枕ニシテ正面向ネルナリ」との二種類の方法が記されている。色々な寝方があるものだが、三例とも横になっているから、それが普通の演技だったのだろう。眠った表現としてより直載であり、美女に不慣れた酒を勧められて完全に酔っ払ってしまった感じも良く出ている。また、小袖をかける手法は、目覚めた後にこれをのけて起き上がる演技と一体になって、状況の急変を劇的に表わす効果がある。

現在能（現在進行形の能）にあつては、へ一角仙人のように、舞を見たり音楽を聞いたりしているうちに不覚にも眠ってしまうなど、たぶらかされて眠る設定が多い。それらの場合たいていは、目覚めてから初めて外的状況の変化に気付き、場面が急転して動きも多くなる。意識や行動の停止である眠りを、状況の劇的変化を引き起こす契機として用いているのである。このような劇構造上の静から動への転換は、睡眠を演技上明確に示しておいた方が効果的に表現できる。もう一つの睡眠のパターンである霊夢を蒙る場合も、その後

の行動を促したり伏線になったりする意味で、夢の中で神仏の告を聞いたことをはっきりさせておく必要がある。夢幻能のワキは睡眠の演技を行なわないのに、現在能ではそれを具体的に演じる理由は、このような事情と、現在能の演技が現実性を重視していることに依るのだろう。眠る演技と目覚める演技とが一体となって劇的效果を高めているもう一つの例を先述した『謡の秘書』から引いておくことにしよう。

○「君聞やく之あたりより少くねぶり、又わさめ、又へねぶりくするなり。「二三べん」の時分よりへ本くねぶる体也。又かりぎぬの袖に取つくも在之。大夫次第也。「御衣の袖をひつきり」と云、しんようほうしろへころび、だいよりおつる。けいかへ右の方へころび落也。立て、ゆめのさめたる体にておき上り、柱に立かくれ候時、ふしんノ体在之。（咸陽宮）

初めはうとうとし、はっと目を覚ましては再び眠るなどを繰り返しながら、やがて本格的に眠り込むというもので、極度な緊張が緩んだあげく、睡魔に襲われていく様子がリアルである。ストーリー展開の面白さで見せる現在能では、このような精緻な「物まね」の演技が物語の迫真性を支えていたのだろう。